

夏目漱石とクラシック音楽

(第17回)

ハイカラの音楽会

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

「ハイカラ」の語源は、高襟 (high collar) である。漱石には、ハイカラ (高襟) へのこだわりがあった。英国から帰国した夫を出迎えた鏡子夫人は、「見たところ洋行前とべつに変わった様子」はなかったが、「ただおそろしく高いダブル・カラー」をつけているのに「物珍しい」と感じている (『帰朝』『漱石の思い出』より)。

弟子の坂元雪鳥は、こんな思い出を語っている。

先生は洋行から帰られると、髪を綺麗に分けて高いカラーをつけ…熊本時代のカラもカフスも無い詰襟姿とは非常に変わって居られた。(『能楽』、大正6年2月)

東京帝大の教壇では、「一体に高襟で、高いダブルカラーに、磨き立てのキツドの靴の、尖の細い踵高な奴をはいて、歩きぶりから一種のリズムを持つて居た。」(野上豊一郎：『漱石全集』月報)

ところで、明治45年 (1912) 6月9日、夏目漱石は、欧米留学から帰国した寺田寅彦だけでなく、折しも上京していた彼の父親まで誘って、東京音楽学校の午後2時開演のコンサートに出かけている。もちろん、フロックコート姿で、白のハイカラーを覗かせていたにちがいない。

その年は指揮者ユンケルの契約最終年ということで、恒例の春季と秋季の年2回の定期演奏会では、特に趣向を凝らしたプログラムが組まれていた。6月9日は春季定期演奏会であった。漱石は帰宅後、日記にこう記している。

上野音楽会を聴きに行く。ハイカラの会なり。管絃楽も合唱も面白し (6月9日付)

一曲目のヴェーバーの歌劇『魔弾の射手』の序曲は、唱歌「秋の夜半」で知られるホルン四重奏による長閑な旋律が有名である。二曲目はメンデルスゾーンのパiano協奏曲。漱石はソロのロイテルの技量を新聞評から熟知していた。三曲目はモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」。2年半前の明治42年11月、山田耕筰がドイツ留学の資金を集めるために開いたコンサートで、漱石が3人の娘と聴いた曲である。四曲目はサン＝サーンスのチェロ協奏曲。名手ヴェルクマイスターは、漱石も寅彦もすでに室内楽コンサートで聴いていた。二人には馴染みのチェリストであった。五曲目はシューマンの合唱曲「流浪の民 Zigeunerleben」。原詩通りの内容で、ドイツ文学者石倉小三郎による見事な訳詞で歌われた。公の場における初演であった。かつてこの曲は、幕末の尊王攘夷派の僧侶月照^{げつしやう}が、正義感から海に入水自殺したことを讃える「薩摩瀉^{さつまがた}」という替え歌で歌われていた。余談だが、2018年のNHK大河ドラマ「西郷どん」では、尾上菊之助が美男の僧、月照役を演じた。さて、トリの六曲目は管弦楽に編曲されたバッハの「前奏曲・コラール・フーガ」であった。このときが、漱石にとって、初のバッハ体験であった。